

●百姓一揆で22人処罰

日向市から国道327号で東郷町山陰に入ると、役場付近から左手に冠岳の秀麗な姿が望まれる。標高四三八^{メートル}。一面を広葉樹林の緑が覆い、特に春には鮮やかな新緑に交じって山桜が映え、美しい。

中心部を抜け、東郷橋を通り、耳川と合流する坪谷川を渡ると、冠岳の西ルート登山口に出る。冠岳にはこのほか三方所の登山口があり、ルートや展望所も整備され、登山愛好家に親しまれている。

東郷小学校の下には道の駅が開設され、地元取れの物産を求めて訪れる人も多い。ここから国道447号に入ると、新東郷橋を経て、百済の里・南郷村に向かう。歌人・若山牧水の歌心をはぐくんできた昔ながらの手つかずの風景が展開、郷愁を感じさせる。

東郷町山陰ですぐ思い起こされるのが「山陰

百姓一揆」。元禄三(一六九〇)年九月に起こり、江戸幕府の記録である「徳川実紀」にも書き残されている。

凶作にもかかわらず、過酷な年貢を徴収する延岡藩の郡代(地方を治める役人の長)梶田十郎左衛門、代官(郡代に次ぐ役人)大崎久右衛門の圧制に反抗、山陰の村民千四百二十二人が高鍋藩領に逃げ出した事件である。人々の中には女性や子供、さらに馬も含まれ、村を挙げての逃散(ちようさん)であった。

高鍋藩は突然のことに驚き、股猪野(都農町)で一行を抑留した。やがて後を追ってきた延岡藩の役人と交渉が始まったが、ことは長引き、幕府に聞こえた。延岡藩の役人と農民代表が江戸に呼ばれ、幕府評定所での評定となった。この結果、「百姓落度」となり、首謀者二十二人がはりつけ、断首、伊豆八丈島への流罪となった。

事件から百二十年後の文化八(一八一二)年、山陰の大庄屋・寺原和右衛門と、成願寺八世・実門叟は逃散した祖先の犠牲を弔うため、寺の境内に供養碑を建てた。村人は幕府に遠慮、朝早く、人目のないときに参拝した。このため、これを朝参供養と呼んだという。

現在、町民は毎年八月十七日に供養している。一九六九(昭和四十四)年には成願寺の裏の丘・西城公園に「山陰一揆の碑」が建てられた。一揆から三百年の八九年(平成元)年には、「逃散三百年記念碑」も建った。

圧制に抗して、民意を貫こうとした先人たち。その魂は今の地域おこしにもつながる大切な精神かもしれない。

甲斐 勝



山陰一揆の碑。背後に冠岳が望まれる